

生涯学習の推進を図るための参加型学習の方法論（2）

清 國 祐 二

はじめに

I 参加型学習の方法論

- 1 ランキングの効果的活用法
- 2 ランキング・ワークシート作成の手引き
- 3 参加型学習を促進するファシリテーター

II 参加型学習の受講者アンケート

- 1 セミナー受講者の属性
- 2 事前アンケートと事後アンケートとの比較分析
- 3 セミナーのインパクト

はじめに

研究報告11号では、平成15年度より島根県立生涯学習推進センター及び同西部生涯学習推進センターと共同研究を重ねてきた「参加型学習の推進を図る実証的研究—ファシリテーター養成プログラムの検証—」を基礎としつつ、筆者の日常的な教育活動の中で実践してきた成果を報告した。本報告は、その成果を引き継ぎ、ランキングの教材開発の視点について言及する。加えて、国立教育政策研究所社会教育実践研究センターにて実施された「参加体験型学習に関する研究セミナー」（平成18年9月13～15日）の受講者アンケートの調査結果も踏まえ、参加型学習の意義について考察する。

I 参加型学習の方法論

1 ランキングの特徴

ランキングの特徴については研究報告11号で触れている。付け加えるとすれば、議論の最終目標がコンセンサスを形成しつつ、順位づけを行うことにあるため、議論が脱線して迷走するリスクが低い討議法だということである。ファシリテーターが議論の進め方を想定しながら、あらかじめワークシートを準備していることによって、限られた時間の中で何かを決定しなければならない際に有効な手法であるといえる。

ランキングの課題については、ラベルワーク（前回は「KJ法」と呼んだが、これからはより一般的な「ラベルワーク」を使用する。）によって集約された意見を、項目として取り上げることで、参加者のより積極的な態度が引き出せることにもつながる。この事例として、平成18年度に丸亀市で実施した、生涯学習推進計画策定のためのワークショップを紹介する。ここでの議論が推進計画に反映されるということもあり、参加者の熱のこもった議論となった。

ワークシート

丸亀市生涯学習推進計画の中に次の内容をどう位置づけたらよいでしょうか？

みなさま方は、現在丸亀市生涯学習推進計画の策定委員として参画していたり、あるいは常日頃から丸亀市の生涯学習に高い関心をもっておられることと思います。
生涯学習社会とは住民一人ひとりが積極的に参加してはじめて形をなします。いくら行政が一生涯命取り組んでも、実際に住民にその情報が届かなかつたり、諸処の活動に参加してもらえなかつたり、住民自らが活動を起こさなければ意味がありません。
理想的には、住民一人ひとりが生涯学習推進計画づくりに参加することで、住民の意思を反映した、明るい未来のための計画をつくることが望ましいのですが、現実的には不可能です。幸い、今回ご参加のみなさま方は、地域の一住民として、また地域の方々とともに近い位置にいらっしゃいます。丸亀市の実態に応じた、実現性の高い夢のある生涯学習推進計画にしていただければと願っています。
まずはその手がかりとして、アンケート調査の項目から気になる課題を10あげてみました。これらの課題にどのように取り組んだらよいのかについて、まずはあなたの主観で結構ですので、A B C Dの各基準に最も近いものを選んで記入してください。(個人作業、約5分。) その後に、グループの他のみなさんの考えをワークシートに写し、グループごとに合意形成をしていただきます。(グループ作業、約40分)

生涯学習計画の内容	あなた 氏 名						グループの特色
コミュニティセンターの利用者(新規)を増やすために、30代前後の世代が参加しやすいような講座を企画する(託児含む)							
生涯スポーツの振興のために、働き盛りの世代をターゲットにしたスポーツ教室を開催したり、スポーツ大会を企画する							
社会教育関係団体や各種団体が自立して活動が行えるように、団体の構成員が事務や事業を担当できるようにする							
台風や大雨、南海地震に備えて、自主防災組織を立ち上げ、できるだけたくさんの参加を得て防災訓練を実施する							
多様な方法で学習ができるように、テレビ・ビデオ・DVD・パソコンなどの機器をすべての学習施設に配置する							
生涯学習の成果を地域で活かしてもらうために、ボランティア登録制度を充実させ、幅広いボランティア活動ができるようにする							
観光のまちづくりに力を入れ、丸亀市にまつわる学習機会を増やすとともに、観光ボランティアの養成と活用を図る							
地域の人と人とのつながりができるような、参加型の催し物(夏祭りやフリーマーケット等)を実行委員会方式で企画する							
自治会等、地域の組織に活力がなくなっているので、団塊の世代が組織の中心メンバーとして活躍できるよう働きかける							
学習情報提供のIT化を進め、ホームページに情報を掲載するだけでなく、メールや携帯電話も活用する							

☆地域で短期的に取り組む必要のある課題を挙げてください。

◆選択の基準

A	今年度中にも実施に移したい内容。まずは、できるところから始めたい。
B	望ましい方向であるが、1年程度の準備期間の中で住民理解を深め、その後実現したい。
C	望ましい内容であるが、3~4年ほど関連事業を進めながら少しずつ住民に浸透させる。時間をかけて実現したい。
D	重要な課題ではあるが、現実的には困難であり、成果がでないと考えられる内容。機が熟すまで先送りする。
E	特に盛り込む必要はない。

☆5年程度の時間をかけて取り組む必要のある課題を挙げてください。

2 ランキング・ワークシート作成の手引き

ランキングはワークシートが討議の成果を大きく左右する。もちろんランキングの効果を上げるためのアイスブレイキングやランキングの前に動機付けのために行うアクティビティ、さらにはランキングを通して得られた結論の全体へ向けた発表とそれへの適切なコメント、最後に学習者相互の振り返り、このような流れがあってはじめてトータルに成果があがったと考えられる。専門家である講師によるレクチャーなどを挟まないのであれば、これら一連の学習活動を支援するのはファシリテーターの役割となる。

ファシリテーターの役割については改めて次項で言及する。ここでは資料に基づくランキング・ワークシートの作成の視点について解説する。資料の出典は、PHP研究所が各種意識調査・アンケート調査を収集及び編集した「The 21 なんでもランキング」(<http://www.php.co.jp/fun/the21/>)である。インターネットで「ランキング」を検索すれば他にもヒットするサイトはあるが、その中で最もデータ数の多い本サイトを紹介する。

ワークシート作成にあたっては、前頁の「丸亀市生涯学習推進計画の中に次の内容をどう位置づけたらよいでしょうか？」をひとつのモデルとして考えてもらいたい。ランキングにはいくつかのパターンがあるが、それについては拙稿「生涯学習の推進を図るための参加型学習の方法論(1)」(『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第11号、2006年)を参考にしてもらいたい。まず、ワークシートのテーマを簡潔に示す。この場合は「丸亀市生涯学習…」である。次にどのような設定にするのかを明確にする必要がある。立場が違えば判断基準も異なるし、グループ討議の際に話が噛み合わなくなる可能性が出てくるため、学習者が条件を共有できるような設定が望ましい。続いて項目設定となるが、基本的には「The 21 なんでもランキング」に記載されている項目をそのまま使い、順序を入れ替えるだけでよい。項目によっては、名詞止めの項目と動詞で終わる項目などが混在している場合があるので、意味を変えずにどちらかに統一した方が学習者は取り組みやすい。最後に、丸亀市のようにA～Eをそれぞれに選択させるのか、項目間の順位をつけさせるのか、学習の最終目的に照らし合わせて、相応しい方法を決めなければならない。以上の条件を勘案しつつ、ワークシート全体を整えていけばランキング・ワークシートとしての一定の水準はクリアーできるはずである。

それでは、後掲の資料に沿ってワークシート作成の視点を例示してみることにする。

1) 「子育てについての不安や悩み」(資料1左)

「子育てについての不安や悩み」を利用して作成するランキング・ワークシートは、家庭教育支援のための学習機会で活用できるであろう。同種の講座へ参加される学習者は、自分の子育てが一段落して「地域で子育て支援をしたい」というニーズをもっている女性が多い。しかし、その人たちが今の親たちを正確に理解できているわけではない。今の親たちがどのようなことに不安や悩みを感じているのかを話し合うきっかけとして、このランキングを利用してはどうだろうか。これらの項目は親であれば多かれ少なかれ感じているものばかりなので、順位づけに重きを置くよりも、今の親の悩みを自分の子育て時と比較してどうとらえたらよいかについて、理解を深めることが目的になるだろう。

2) 「子供の抱えている不安や悩み」(資料1右)

「子供の抱えている不安や悩み」を利用して作成するランキング・ワークシートは、PTAや子育て中の親を対象にした家庭教育学級などで活用できるであろう。実際の子どもの不安や悩みと、親が考える子どもの不安や悩みのギャップを確認することができれば、これからの子どもとのコミュニケーションのあり方に好影響を及ぼすことが考えられる。親が平日頃わが子をどのように見ているのかを、母親たちが相互に理解し合うことにつながることも考えられる。PTAなどの関係づくりも含めて、意味の

ある学習機会が提供できるだろう。

3) 「10代の女子が考える『人生の成功』」(資料2)

「10代の女子が考える『人生の成功』」を利用して作成するランキング・ワークシートは、同世代の中高生や大学生などを対象にした進路を考える時間などで活用できるであろう。最近では、中学校や高校でキャリア教育が推進されているが、彼らの生き方や価値観を考える題材として相応しいのではなかろうか。この時期には多様な価値観に触れることも大切であるが、そのような価値観がどのような背景によって生まれてきたのかを、同世代の若者が理解し合うことは、「認め合う多様性」をつくるためにも必要なことである。

4) 「子供の安全対策」(資料3)

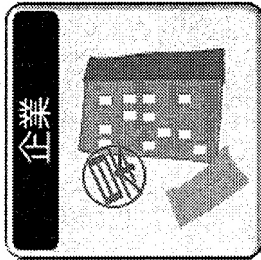
「子供の安全対策」を利用して作成するランキング・ワークシートは、地域の青少年健全育成団体や民生・児童委員、PTA、子ども会育成会などの研修会で活用できるであろう。このアンケートは「小学生をもつ保護者」に対して実施したものであり、第三者的な意見ではないところに配慮する必要があるが、「親が何をもって安心するのか」という親の心理を理解しておくことは、支援する側にとっても重要なことである。

5) 「尊敬できる上司の性格」(資料4)

「尊敬できる上司の性格」を利用して作成するランキング・ワークシートは、企業や行政の管理職研修などで活用できるであろう。部下との関係づくりに思い悩む管理職は意外と多い。異世代とのコミュニケーションが不得手な若い層には、「阿吽の呼吸」で物事を進めたり、「暗黙の了解」を求めたりしても、仕事が思うように進展しない。これまでそのような世界で生きてきた現管理職も実は、コミュニケーション不全であるのかも知れない。部下に理解を求めるための、管理職自身の振る舞いについて考えたり、部下とのオーラル・コミュニケーションのあり方を考える契機としたい。現代社会ほど、後輩の育成機能が求められる時期はないのである。

THE 21 なんでもランキング

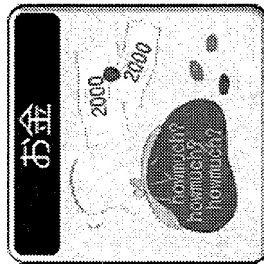
出所 <http://www.php.co.jp/fun/the21/>



- 若手社員に「不足の能力」
- 自信がないビジネスマナー
- ベスト企業市民ランキング
- “ここまでは許せる”部下のマナー違反
- 尊敬できる上司の性格
- 2006年新重販売ランキング
- 2007年の日本をイメージする漢字
- ビジネスマンの情報源
- オフィス・アパレルの参考にしたい有名人
- 企業サイトの情報発信力
- ----->その他(全112件)



- 子供にさせたいスポーツ
- 子供の安全対策
- 10代の女子が考える「人生の成功」
- 世界の大学の競争力
- 10代の若者の
- 「日本の好きなおとこ」
- 世界の19歳の「数学的応用力」
- 子育てについての不安や悩み
- 仕事をすることで影響を受けたこと
- 大学発ベンチャーの企業数
- ----->その他(全49件)



- 「英国サッカー界」の長者番付
- 著名故人の所得番付
- 世界各都市の生活費
- 「株式投資」に興味がある理由
- ハリウッド女優の映画出演料
- 臨時ボーナスをあげたい人
- 家計に影響を与える出来事
- 新入社員が貯蓄を始める動機
- ビールの生産量
- 高額地価上位地点
- ----->その他(全58件)



- 全国首長の「理想のリーダー」
- 生活の豊かさランキング
- 2006年版国際競争力
- 相対的貧困率ランキング
- 2005年の世界競争力ランキング
- 国立大学の決算ランキング
- 真つ先に断行したい行政改革
- 2005年の世界競争力
- 国のIT競争力
- 罰則を強化してほしい行為
- ----->その他(全68件)



- 温暖化ガス排出削減事業に熱心な
- 良い空気のある場所
- 低燃費のガソリン普通・小型乗用車
- 全国水質調査ワースト5
- きれいな川・活い川
- 自動車排ガス測定点ワースト10
- 浮遊粒子状物質測定点ワースト10
- 危機感・関心をもっている環境問題
- 聞いたことがある新エネルギー
- 環境対策に積極的なイメージの企業
- 地球環境問題で心配なこと
- ----->その他(全13件)

☆上のURLのような各種ランキングを集めているサイトなどが使
いややすい。また、各省庁の調査データもランキングとして活用で
きる。

☆ランキングの課題を作成する場合、①内容がどれだけ学習者の関
心を引きものであるか、②現在どれほど世の中に流通しているも
のであるか、③話し合うことにより問題が整理できたり新しい
気づきがあるか、④その成果が学習者の意識や行動に影響を及ぼ
すものであるか、などに留意しながら行う必要がある。

☆学習プログラム作成の視点でいえば、さまざまなランキングを調
べながら学習課題を整理していく方法と、あらかじめある学習課
題を学習プログラム化していくために適当なランキングを探す方
法とふた通りある。通常は後者であるが、ここでは前者の方法を
紹介する。

<資料1>

■子育てについての不安や悩み

1	勉強や進学	37.8
2	しつけ	34.9
3	とくにない	33.5
4	性格やクセ	30.8
5	健康	27.6
6	友人	18.4
7	育て方に自信がもてない	14.3
8	いじめ	13.1
9	暴力や非行	8.8
10	保育園・幼稚園・学校に行くのを嫌がる	8.3

■子供の抱えている不安や悩み

1	とくにない	45.5
2	勉強や進路	39.8
3	顔や体形	23.2
4	友人	21.5
5	性格やクセ	20.8
6	学校生活	20.5
7	健康	17.4
8	ボーイ（ガール）フレンド	13.6
9	家庭	13.2
10	いじめ	13.1

全国の満3歳～中学3年生までの児童のいる世帯を対象に、厚生労働省が行なった「児童環境調査」によると、保護者が子育てについてもっとも心配しているのは、「勉強や進学」であった。ニュース報道で話題となる「いじめ」や「不登校（園）」は、それぞれ8位、10位と、意外にも下位だった。対して、子供の側が抱えている不安でもっとも多かったのも、「勉強や進路」。年齢が上がるほど不安を感じている割合が増えており、平均しても、約4割の子供が不安を感じていることがわかった。また、子供が感じている不安の3位には「顔や体形」が挙がっており、顔の整形やダイエットの流行が、日本においても低年齢化している傾向を裏づけている。こうしたなか、3分の1の親と半数近くの子供が、「とくにない」と答えているのは、ほんとうに不安がないからなのか、それとも楽天的すぎるからなのか？（THE21 2003年4月号掲載）

<資料2>

■10代の女子が考える「人生の成功」

1	安定した生活	46.5
2	愛する人	46
3	お金	36.5
4	やりがいのある仕事	31
5	家族	30.5
6	他人からの信頼	30.5
7	パートナー	29.5
8	友人	29
9	才能	25
10	社会的名誉・地位	20

博報堂生活総合研究所が首都圏に住む16歳～19歳の女子200人を対象に行なった意識調査によると、「人生の成功とは〇〇を手にすること」という質問で、〇〇に10代の女の子が当てはめた言葉では、「安定した生活」がもっとも多かった。上位にはほかにも、「愛する人」「やりがいのある仕事」など。大きな理想を追い求めるより、着実によい生活を維持したいという10代女性の堅実な意識が垣間みえる。（THE21 2005年4月号掲載）

<資料3>

■子供の安全対策

1	知らない人についていかないように注意させる	75.9
2	子供の外出先を把握する	69.3
3	防犯ブザーをもたせる	59.6
4	一人で遊ばせない	51.9
5	近所の危険な場所をチェックする	28.7
6	外出時に送迎をする	23.3
7	携帯電話／PHSをもたせる	16.3
8	学校への登下校時に送迎をする	11.8
9	防犯グッズをもたせる	7.1
10	その他	3.0

(株)マクロミルが、小学生の子供がいる全国の保護者を対象に実施した「子供の安全に関する調査」によると、親の9割が子供の安全に「不安を感じる」と回答。安全対策として実施していることは何かを尋ねたところ、「注意事項を話して聞かせる」「外出先を把握する」などの項目が並んだ。とくに女兒がいる親ほど注意深く行動する様子がかがえ、多発する児童殺傷事件に、全国の親が神経を尖らせている。(THE21 2006年3月号掲載)

<資料4>

■尊敬できる上司の性格

1	正当に評価してくれる
2	責任転嫁しない
3	決断力がある
4	差別、ひいきがない
5	信頼感がある
6	人間的魅力がある
7	部下の失敗を完全にリカバリーできる
8	よく話を聞いてくれる
9	面倒見がよい
10	教え方が上手

「私をちゃんと評価して！」gooリサーチが集計した「尊敬できる上司の性格」ランキングによると、「正当に評価してくれる」がトップ、以下「責任転嫁しない」が続いた。一生懸命やっているつもりでも、「上司が評価してくれない」と不満を抱える部下は少なくない。評価されない部下が悪いのか、はたまた評価しない上司が悪いのか……。双方が納得できる“理想の評価”の実現は、なかなか難しそうだ。(THE21 2007年3月号掲載)

3 参加型学習を促進するファシリテーター

1) ファシリテーターの役割

ファシリテーターとは一般的に学習促進者・支援者と訳されることが多く、学習の目的を達成するために、学習者にどのような働きかけをすればよいのかを絶えず判断しながら、臨機応変に支援する役割を担うと考えられている。ひとりひとりの学習者に個別に影響を及ぼす講義等とは異なり、集団力学を活用しつつ、相互に刺激し合い、受容し合い、学び合うよう環境を整えることにその特徴が見られる。そのためファシリテーターには学習の成果に対する責任(意識)が相対的に大きくなり、学習場面における学習者

との関係性もより緊密になる。そこでの経験はセルフ・ディベロップメントに最も適しており、学ぶという活動を多面的に理解する上でも重要な役割を果たすと考えられる。

一方で、コーディネーターとの違いが明確でないという指摘がなされたり、学習の企画立案者がインストラクター兼ファシリテーターを強く要望していることに鑑みると、まだファシリテーターという言葉や機能が市民権を得ていないことがわかる。ファシリテーター (facilitator) は、facilitateの名詞形であるが、facilitateには「<事情が事を>容易にする；楽にする；促進（助長）する」（『リーダーズ英和辞典』研究社）という意味があり、学習を促進することに加え、容易にすることも含んでいる。facilityが「設備、施設」に加えて、「容易さ；《容易にまなびまたは行う》才、器用さ、腕前、流暢」（『リーダーズ英和辞典』）を含意することを考え合わせると、とても興味深い。

ファシリテーターに定型があるかどうかについても明確になっているとはいえない。務める人の立場によっても大きく異なることが想定される。たとえば、筆者はさまざまな場所で参加型学習を取り入れた学習機会に指導者として関わっているが、そこで求められる役割はレクチャーとファシリテーターの双方である。基調となる内容を講義した後に、学習目的を達成するに相応しい学習課題を提供し、参加型のグループ学習によって深めてもらうのである。レクチャーとファシリテーターがひとりであるため、講義と参加型学習との接続が容易であり、連続性を確認しながら学習が展開できる。これが行政職員であったらどうであろうか。レクチャーを兼ねることも場合によっては可能であるが、基本は学習のコーディネーターとして企画立案し、学習の目的を達成するためのあらゆる調整をして、学習の場面でうまく進行していくことになるだろう。その進行の役割においてファシリテーターの機能を発揮することになる。他にも、問題・課題意識が強く、その内容について学習を積み重ねているNPO関係者であれば、どのようなファシリテーターとなるであろうか。教育の専門家ではないコミュニティセンター等の職員であればどうであろうか。ベシクな技能は必要であるが、ファシリテーターのあり方は多様であり、ある程度実践を重ねたところで検証の後、再構成していく必要がある。

2) ファシリテーターを求める社会背景

小さな行政をめざす方向で世の中が進んでいる現状を勘案すると、公共サービスの縮減は既定の路線であり、少なくとも税金でまかなわれるサービスは減少するだろう。対価を支払うことで民間サービスを受けられる所得層はよいとしても、住民の多くは十分なサービスを受けられないまま、困難な生活を強いられることが予測される。人びとの関係が希薄になり続け、所得階層によっても分断されれば、国レベルの大きな格差社会を漠然と認識しても、コミュニティ内の小さな格差社会には目が向けられないまま放置されることになる。小さな格差が大きな格差を生み出す循環社会や再生産社会を是正せずして、そこで起こる格差現象を自己責任として片付けるのはあまりに残酷だ。

その文脈で考えれば、暮らしやすい社会をつくるために、地域の自助・共助の範囲を広げざるを得ない。しかし、自助・共助とは地域住民の意識や関係性に依存するので、放っておいて進むものではない。だからこそ、住民の意識を自助・共助に向けるような教育・学習が必要になり、それを住民の合意形成をしつつ行うことのできるファシリテーターが必要となってくる。今、本当に必要なのは地域住民の関係づくりであり、信頼関係の構築であり、共助の意識の醸成だといっても過言ではないだろう。

還暦を迎えた教育基本法が2006（平成18）年12月に改正された。戦後の復興と高度経済成長が置き忘れてきた公共の精神を取り戻す必要性が盛り込まれた。機能の高度化をともなう社会の成熟化は過度な個人主義を進めてしまい、価値観の多様化は「主張する多様化」に偏向し、本来向かうべき「認め合う多様化」からはほど遠い。社会教育も「個人の要求」に応じるとともに、「社会の要請」に応えるべきであるとも

された。私たちの課題は、社会における共通の価値観（公共）をつくりだし、それを共有することであり、新たな公共の精神を再構築することにある。その推進に最も近いところにあるのが社会教育であり、これまで蓄積してきた成果を「ファシリテート」の視点で改めて検証する必要がある。

3) 社会教育主事に求められる資質や能力から

生涯学習や社会教育における指導者は従来から、学校の教員のように「教える」ことが職務ではないとされてきた。地域における教育・学習計画を立案したり、個別の学習プログラムを企画・運営したり、学習や学習者を組織化したり、というような仕事の仕方であった。社会教育における指導者として代表的な社会教育主事をとりあげて、ファシリテーターとの関連性を探っていきたい。やや古くなるが、1986（昭和61）年の社会教育審議会報告「社会教育主事の養成について」では、社会教育主事に求められる資質・能力を、①学習課題の把握と企画立案の能力、②コミュニケーションの能力、③組織化援助の能力、④調整者としての能力、⑤幅広い視野と探求心、の5つにまとめている。どれも比較的理解しやすい資質や能力となっており、普遍性の高いものだと考えられるが、これらは必ずしも同じレベルにはない。

②「コミュニケーションの能力」と⑤「幅広い視野と探求心」に関していえば、それらは人間性なども含む資質に該当する項目で、社会教育主事ならずとも、多くの職業で前提とされる能力である。このふたつの能力は、一定時間学習すれば身に付くという類のものではないため、off-JTで獲得したり、実感したりするには、それ相応の工夫が必要となる。逆に、OJTの中で自然と身に付くものであるかということ、必ずしもそうではない。off-JTとOJTの両者が相互に刺激し合い、自覚をうながすことが肝要となる。人と関わる職業であり、人と人との関わりをコーディネートする役割であるからこそ、②と⑤は職務遂行のためのベーシックな能力と解される。続いて、①「学習課題の把握と企画立案の能力」に関してはテクニカルな要素が多く含まれるため、off-JTでも十分獲得可能な領域であるといえる。それに類する職務経験があればさらに効果的な学習が可能となる。日常業務の中では職員自身の経験に基づく発想となりがちで、「勘」に頼ることが多くなることが想像される。それ自体に問題があるわけではないが、時に理論軽視の状態に陥ることがある。理論から学んだり、そこから自分の位置を確認したり、新しい自分にチャレンジしようとする姿勢に欠けることが問題である。実践者が理論に耳を傾けない理由のひとつに研究者の現場に対する無理解があげられるが、いずれにしても相互の関わりこそ重要で、新しい概念の創造には両者の協力が不可欠である。



③と④に関してはその中間に位置し、技法的な学習もあれば、それを発揮するために資質も重要となる、というような位置関係であろうと考える。

上記のような資質と能力を兼ね備えた人物であれば、ファシリテーターのベースは十分担保できているといえる。その上で、成人教育学に基づく教育方法ともいえる参加型学習の手法を身につけ、さらに実践の中で日常的な力量形成を図れば、質の高いファシリテーターが生まれてくるであろう。

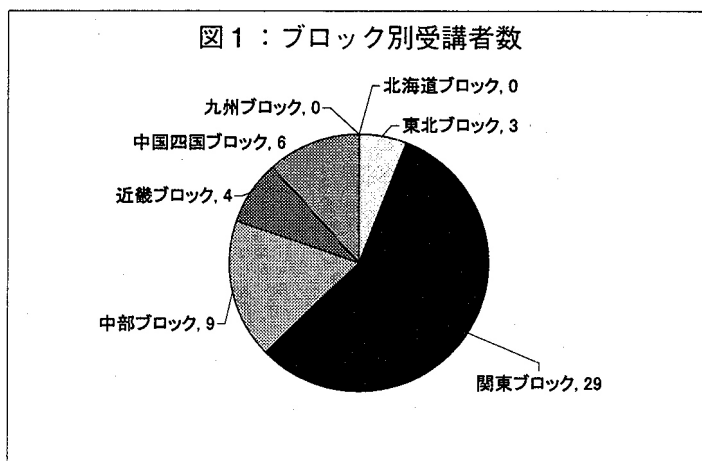
II 参加型学習の受講者アンケート

1 セミナー受講者の属性結果

第1回セミナー受講者52名の内、有効回答の51名のデータをもとに分析する。

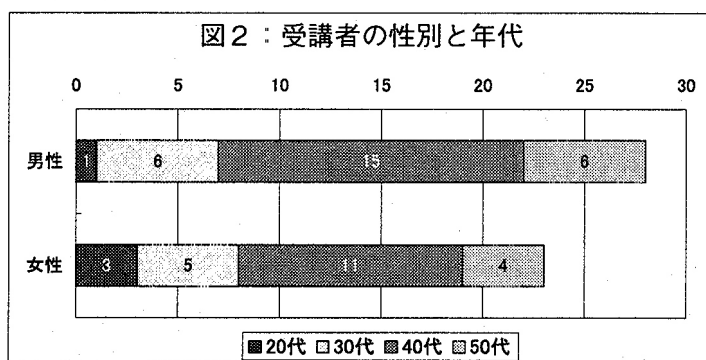
1) ブロック別受講者数

セミナー受講者をブロック別に示したものが右の図1である。「関東ブロック」が29名(56.9%)と最も多く、「中部ブロック」の9名(17.6%)、「中国四国ブロック」の6名(11.8%)がそれに続いている。



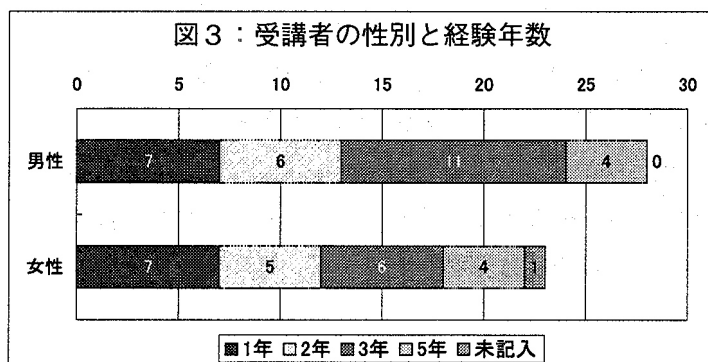
2) 性別と年代

セミナー受講者を性別と年代で示したものが右の図2である。男女とも40代の参加が最も多くなっている。(男性15名(53.6%)、女性11名(47.8%)) 続いて、30代、50代となっている。



3) 性別と経験年数

セミナー受講者を性別と経験年数で示したものが右の図3である。男性は「3年」が11名(39.3%)と最も多く、続いて「1年」7名(25.0%)、「2年」6名(21.4%)となっている。一方、女性は「1年」が7名(30.4%)と最も多く、「3年」6名(26.1%)、「2年」5名(21.7%)となっている。



2 事前アンケートと事後アンケートの比較分析

通常、事前アンケート（以下「事前」）と事後アンケート（以下「事後」）を比較する場合、同じ調査項目を用いることにより、事前と事後にどのような変化が生じたか、そしてそれらの変化は優位な差が認められるのかどうかを検証することが主たる方法であった。本報告では、自由記述に着目し、その記述の傾向にどのような相違が見られるのかを検証してみた。分析にはテキストマイニング・ソフトウェアである“TRUE TELLER”（野村総合研究所）を用いた。テキストマイニングとは、テキスト（文章）をマイニング（発掘）すること、つまり定型化されていない文章の集まりの中から価値ある情報を掘り出すといった意味が込められている。その際に、自然言語解析の手法を用いて単語やフレーズに分割された言葉を、出現頻度や相関関係などから有用な情報を抽出するシステムとなっている。

文章や言葉は曖昧なために、いくら性能の優れたテキストマイニング・ソフトであっても、完璧な解析とはならない。したがって、随所で人間の判断が必要になり、そのため一定のルールのもとに、同様の意味をもつ言葉は同義語としてカウントさせたり、指示語等それ自体意味をもたない言葉は削除していることを予め断っておく。

1) 名詞

文章を分析して抽出された名詞のうち、意味をもたない単語を削除した上で、上位20位までを載せたものが表1である。頻度と件数とあるが、頻度とはグループ内の文章でその単語が使用されている回数を表し、件数とはその単語を含む文章数を表している。

表1：事前事後の名詞比較表

	単語（事前）	頻度	件数		単語（事後）	頻度	件数
1	参加体験型学習	23	21	1	参加体験型学習	27	23
2	手法	23	18	2	ファシリテーター	18	15
3	今後	11	11	3	手法	18	14
4	学習	12	11	4	学習	24	13
5	プログラム	8	8	5	参加者	20	13
6	フィードバック	7	7	6	プログラム	11	8
7	研修	6	6	7	アクティビティ	12	8
8	ファシリテーター	6	6	8	参加	9	7
9	ワークショップ	6	6	9	体験型	9	7
10	参加	6	6	10	目的	7	6
11	実践	5	5	11	テーマ	6	6
12	体験	6	5	12	意義	5	5
13	企画	5	5	13	効果	5	5
14	事業	6	5	14	体験	6	5
15	活動	5	5	15	ねらい	7	5
16	運営	6	5	16	課題	4	4
17	参考	5	4	17	役割	5	4
18	講座	5	4	18	講義	4	4
19	参加者	4	4	19	経験	4	4
20	公民館	5	4	20	理解	4	4

全体の傾向を見ると、事前と事後で上位に並ぶ名詞は共通しているものの、件数及び頻度は増加していることが分かる。頻度の総計は事前が160件に対して、205件と約1.3倍になっており、セミナー参加後の方が記述文字数は多くなっている。

質的なものを見ると、事後の「アクティビティ」「目的」「テーマ」「効果」「ねらい」などが、事前には見られなかった言葉として注目される。事前には「フィードバック」「ファシリテーター」「ワークショップ」とともに、「実践」「運営」「活動」「事業」などが多用されている。前者は参加体験型学習に密接に関わる言葉であるが、後者は社会教育担当者がよく使用する言葉である。このように比較すると、事前に抱いていた参加体験型学習と日常業務との関係性への戸惑いが、セミナーを通して鮮明になり、導入や活用のために何が必要になるのかを考えられる段階へとステージアップしたことが窺える。

図4：事前の単語マップ

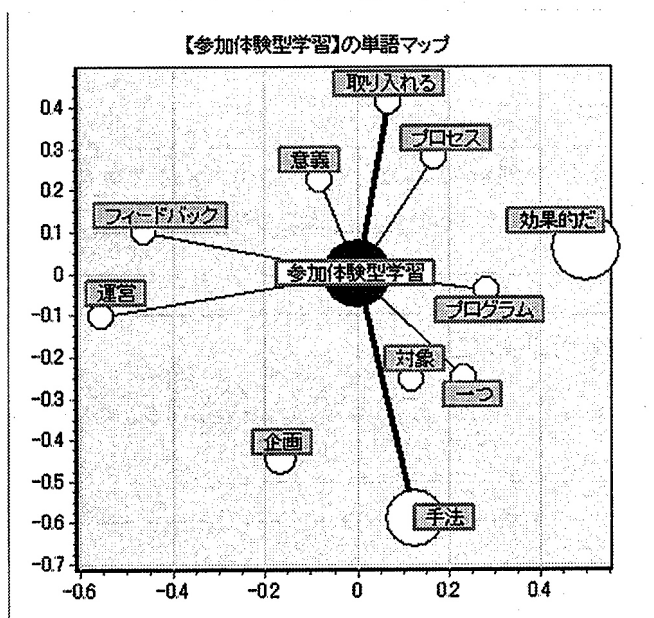
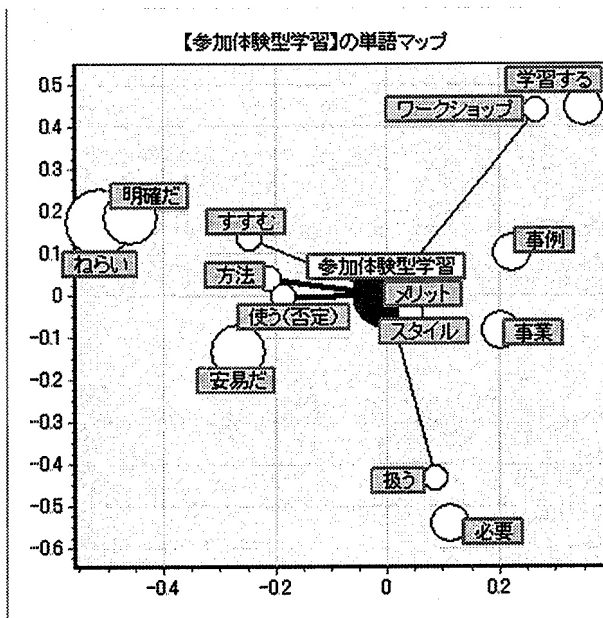


図5：事後の単語マップ



事前及び事後ともに「参加体験型学習」が最大になっているが、もう一步踏み込んで分析をしたものが上の図4及び図5である。図の見方であるが、位置が近い単語ほど同時に利用される関連性の高い単語であり、線が太いほど係り受けが多くなり、円が大きいほど件数が多いことを意味する。図4では単語が放射線状に並んでおり、「参加体験型学習」との親密性はあるがそれぞれの単語の関係はそれほど親密ではない。つまり参加型学習を含む文章が単文に近い形で列記されていることが読み取れる。一方、事後を示す図5を見ると「参加体験型学習」の周辺に位置する単語が一定の固まりとなっており、相互に関連していることが分かる。例えば、参加体験型学習は「方法であり、安易には使えない」、「ねらいを明確にして進める必要がある」などである。事前事後の参加体験型学習への認識の変容はここからも読み取れる。同じく、「手法」や「学習」についても差が確認された。

2) 形容語

名詞と同様に、形容語について抽出したところ、表2のようになった。事前の文章に含まれる形容語は7個であったのに対し、事後には59個となり8倍以上使用されていることとなる。上で指摘した、事前の文章が単文ないし、奥行きのないものであることが、この結果からも読み取れる。

表2：事前事後の形容語比較表

	単語 (事前)	頻度	件数
1	効果的だ	8	8
2	様々だ	4	4
3	主体的だ	3	3
4	よい	1	1
5	相応しい	1	1
6	正しい	1	1
7	新しい	1	1

	単語 (事後)	頻度	件数
1	必要だ	9	9
2	ない	5	5
3	明確だ	4	4
4	楽しい	4	4
5	安易だ	4	4
6	大切だ	4	4
7	しっかり	3	3
8	主体的だ	3	3
9	様々だ	3	3
10	多い	2	2
11	有効だ	2	2
12	十分だ	2	2
13	難しい	2	2
14	効果的だ	2	2
15	大きい	2	2
16	細かだ	2	2
17	多様だ	2	2
18	正確だ	2	2
19	柔軟だ	2	2
20	良い	2	2

質的なものを見ると、事後には「必要だ」「明確だ」「大切だ」「有効だ」「十分だ」「柔軟だ」「良い」などの肯定的な形容語が多く使用されることになる。加えて、「ない」「安易だ」「難しい」などの困難や留意を表す形容語も使用されている。一方、事前には基本的に肯定的要素の強い単語しか記入されていない。

そこで、代表的な形容語がどのように使用されているのか、単語のマッピングをして傾向を把握したい。まず、事前で最も多かった「効果的だ」をマッピングしてみた。(図6) 名詞の場合と異なり、「効果的だ」という価値を含む形容語となっているため、単語のまとまりが明確に見えた。「状況に応じて参加体験型学習という方法を活用すれば効果的である」や「効果的な進め方を学びたい」、「人材育成を行う一つとして効果的である」などがそれである。

事後の単語としては「必要だ」「安易だ」「大切だ」に注目してみた。「必要だ」のマッピング(図7)を見ると、「プログラムへの配慮や参加体験型学習の検証が必要だ」や「場合によっては柔軟に変更することが必要だ」などの記述となっており、盲目的に必要なのみ訴えているわけではないことが分かる。「安易だ」のマッピング(図8)でそれを確認すると、「安易には実施できない(使えない、行えない、取り入れられない)」が、使う場合には「対象者や場所、目的や効果を勘案し導入しなければならない」ことが記入されている。最後に「大切だ」であるが、参加体験型学習を実施するに当たって「チームによる事前の研究が大切だ」や、参加体験型学習を通して「気づきや体験が大切にされ、多面的な見方が引き出されることが重要である」、「ファシリテーターの資質や専門性が大切であることが再確認できた」などがある。

図6：事前の「効果的だ」単語マップ

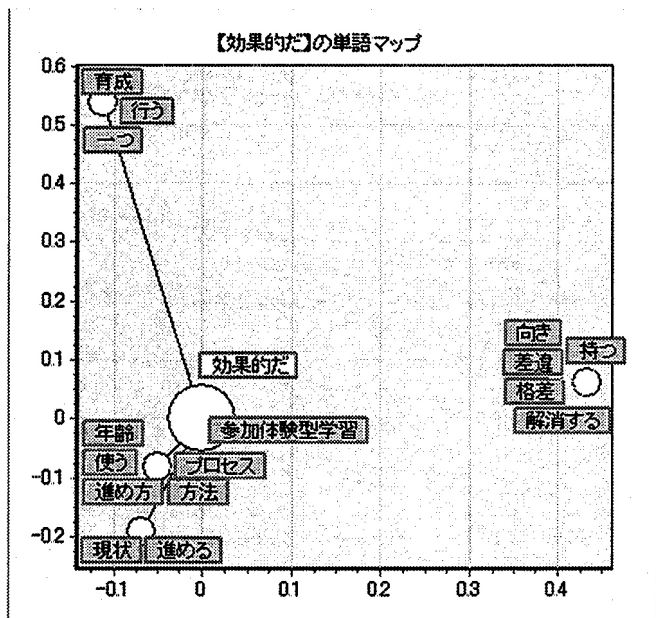


図7：事後の「必要だ」単語マップ

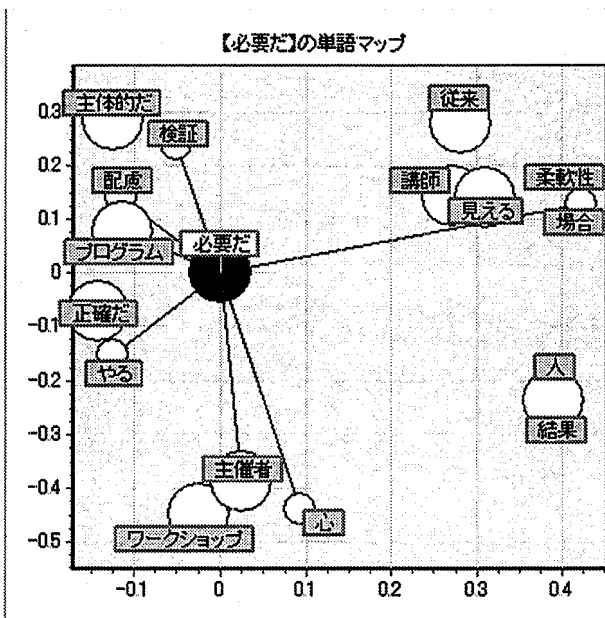


図8：事後の「安易だ」単語マップ

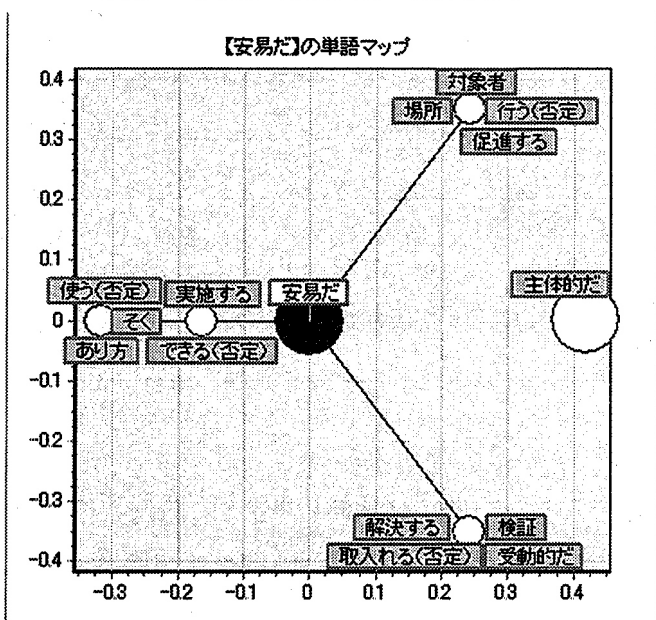
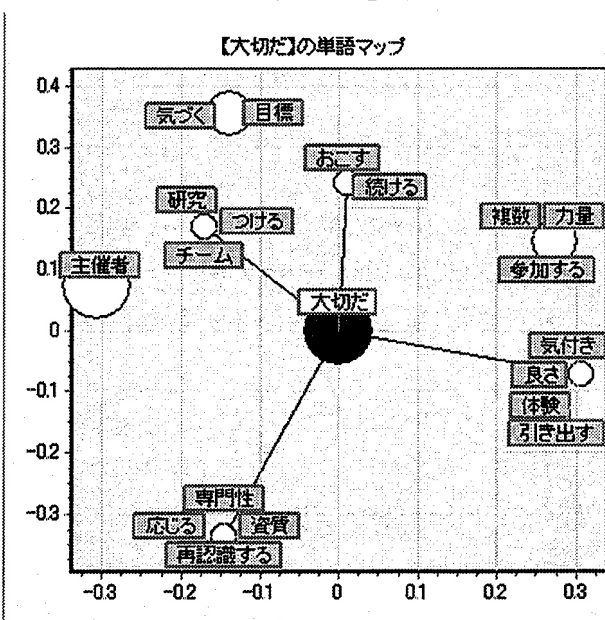


図9：事後の「大切だ」単語マップ



3) 動詞

同様に、動詞について抽出したところ、表3のようになった。事前の文章に含まれる動詞は34個であったのに対し、事後には100個を超えている。事後の動詞を見ると分かるが、事前にはなかった否定形が散見できる。形容語の時にも指摘したが、参加体験型学習への否定的な見方が出てきたのではなく、参加体験型学習の形態をとる場合には、目的を達成するために相応しい方法を選択しなければならないという理解が深まったことによるものであろう。また、当然のことであるが、事前は「～したい」という語尾と結びつく単語が多く、事後は「(セミナーに参加した結果)～できた」という意味の単語が多くなっている。

表3：事前事後の動詞比較表

	単語 (事前)	頻度	件数		単語 (事後)	頻度	件数
1	学ぶ	7	7	1	知る	7	6
2	応じる	3	3	2	理解する	5	5
3	実施する	2	2	3	わかる	5	5
4	取り入れる	2	2	4	学ぶ	5	4
5	開催する	2	2	5	応じる	4	4
6	高まる	1	1	6	使う	3	3
7	学び得る	1	1	7	得る	3	3
8	頂く	1	1	8	参加する	3	3
9	付ける	1	1	9	聞く	3	3
10	活用する	1	1	10	学習する	3	3
11	紹介する	1	1	11	終わる (否定)	2	2
12	支援する	1	1	12	使う (否定)	2	2
13	研修する	1	1	13	すすむ	2	2
14	活動する	1	1	14	達成する	2	2
15	踏み出す	1	1	15	実感する	2	2
16	企画する	1	1	16	深める	2	2
17	込める	1	1	17	組み込む	2	2
18	役立つ	1	1	18	体験する	2	2
19	学習する	1	1	19	進める	2	2
20	係わる	1	1	20	引き出す	2	2

4) キーワード抽出

事前及び事後に偏って出現している特徴的な単語をスコア順 (偏り具合順) にランキングしたものが表4である。ここに表示されている単語は、他のグループではあまり出現していないのに、そのグループに限って出現しているものになり、スコアの低いものほどその傾向が強いことを示している。ちなみに、これらの単語はカイ二乗検定を用い、最大値が1となるように算出している。

表4のキーワードは、スコアと件数から0.045を超える単語に絞った。結果を見ると事後のキーワードが突出しているが、これは形容語や動詞が事後に数多く使用されたことを背景にもつ。参加体験型学習のイメージが、セミナー参加後に受講者にとって一定の意味のまとまりを形成したことを示していると理解してよからう。名詞の違いに注目すると、「(セミナーの) フィードバック」「今後に (活かしたい)」「実践が (知りたい)」「活動に (活かしたい)」などの漠然とした期待から、「(多様な) アクティビティを (知った)」「参加者に (応じたプログラム)」「目的やねらいを (明確にして)」「重要性を (感じた)」などの学習成果の確認へと変容したことが窺える。

表4：事前事後のキーワード抽出

	事前・学びたいこと	品 詞	スコア	件 数	事後・学び得たこと	品 詞	スコア	件 数
1	フィードバック	名 詞	0.0699	7	必要だ	形容詞	0.1193	9
2	今後	名 詞	0.0630	11	アクティビティ	名 詞	0.1047	8
3	実践	名 詞	0.0485	5	参加者	名 詞	0.0774	13
4	活動	名 詞	0.0485	5	知る	動 詞	0.0764	6
5					目的	名 詞	0.0764	6
6					ファシリテーター	名 詞	0.0700	15
7					わかる	動 詞	0.0628	5
8					ねらい	名 詞	0.0628	5
9					理解する	動 詞	0.0628	5
10					安易だ	形容詞	0.0495	4
11					講義	名 詞	0.0495	4
12					楽しい	形容詞	0.0495	4
13					重要性	名 詞	0.0495	4
14					大切だ	形容詞	0.0495	4
15					明確だ	形容詞	0.0495	4

5) その他のクロス集計

今回の事前及び事後アンケートに記入を求めた属性は、県名、性別、年齢、勤務先、職名、勤務年数であり、特に性別や年齢、勤務年数によって有意な差が生じるかについて分析を行った。性別による有意さはほぼなかったとよい。年齢や勤務年数による差異は若干確認されたが、事前事後比較ほど明確なものでなかったため、ここでは紹介していない。調査対象が52名と少数であったことも、定性的な文章を定量的に分析しようとする際の障害となった。この点については今後の課題としたい。

3 セミナーのインパクト

本調査結果のまとめにかえて、事前及び事後に実施した受講者アンケートから導かれる「参加体験型学習に関する研究セミナー」のインパクトについて触れておきたい。

本セミナーを実施するにあたり、センター職員と講師とのコンセンサスはどこにあったのだろうか。簡潔に述べるとするならば、「参加体験型学習への期待は全国的に高まっており、多くの講座で導入されるようになってきた。しかし、その学習形態や手法を用いることが目的となっているケースも多く見られ、必ずしも効果的な学習となっていないのではないか。」という問題意識のもと、「参加体験型学習の意義とその効果について正確な理解を深めるとともに、高度情報社会における有効な学習形態・学習方法であることの認識を覚醒することが現段階では重要ではないか。」というものであったと理解している。

その前提に立てば、今回のセミナーの事前と事後の自由記述を比較してみたときに、受講者の明らかな変容が読み取れた。参加体験型学習が喧伝される中、安易な利用は慎むべきであるが、目的を達成するための効果的利用は促進されるべきだとする受講者の理解は、プログラムの企画立案に大きな影響を与えるとともに、今後の自律的学習の方向付けにもなったと考えられる。そうであるとするならば、本セミナーは参加体験型学習の理解や手法の獲得に資するプログラムにとどまらず、自己主導的学習者 (Self-directed Learner) の育成に有効なプログラムとしても評価できよう。